

奈良朝における知識について

井上正一

一 民間における知識の受容

狩谷棧斎が、その著「日本靈異記攷証」の中で、「知識は社を結ぶと云うに似て今俗の講中のごときものである」と云っている通り、知識は一つの事業を行なうのに大勢の人が信仰によって結ばれ、力を結集することである。しかし講のごときものと云うより、むしろ知識の発展転化したものが講であると考えるべきであろう。まずいくつかの資料によって初期の知識の状態を概観して置きたいと思う。(●点筆者)

(一) 法隆寺 釈迦如来光背銘(推古三十一年、622)

信道知識現在安隱

(二) 西琳寺縁起 阿弥陀如来造像記(齋明五年、669)

蓋聞法身無相非以色求本姓寂寥非以生滅得但四生殊菓六道各因所以法藏此丘卅八願三輩往生是以書直大阿斯高君子支弥高首修行仏法草創西琳寺復以栴檀高首土師長兄高連羊古首散奉塔寺宝元五年己未正月二種知識敬造弥陀仏像并二菩薩願(以)此功德現世親族福延万世七世父母随意住□含靈之類同斯福力

(三) 野中寺 弥勒菩薩造像記(天智五年、666)

丙寅年四月大旧八月癸卯開記橋寺智識之等詣中宮天皇大御身旁坐之時誓願之奉弥勒御像也友等人數一百十八是依六道四生人等此教可相之也

(四) 金剛場陀羅尼經願文(天武十四年、686)

歲次丙戌年五月川内国志貴評内知識為七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此善因往生淨土終成正覺 教化僧宝林

(五) 長谷寺 法華説相図銅板銘(天武十四年、686)

道明率引捌拾許人奉為飛鳥淨御原大宮治天下天皇敬造

(六) 高田里知識碑(神龜三年、726)

上野国郡馬郡下贊郷高田里三家子孫為七世父母現在父母現在侍家刀自□□君目道刀自又兒□那刀自孫物部君手足次馴刀自次若馴刀自合六口又知識所結人三家氏次知万呂鍛師礪マ君牛麻呂合三口如是知識結而天地誓願仕奉石文 神龜三年丙寅二月廿九日

以上六例の内、(一)の「道を信ずる知識」を除いた他は全て民間に

あつて組織された知識である。

(二)の「二種の知識」は、恐らく高氏、土師氏の一族で組まれた知識であると推定出来るし、(三)の場合は高田里三家氏一族の知識で、(四)は同族間での知識に分類できる。

次に(四)(五)の場合、特に(四)は、百十八人とか八十余人とかの参加人員を記しているし、(五)では志紀郡内の人々の参加が考えられこの三例には一般民衆の知識参加を認めることができる。

また(二)(四)の三例が、河内のそれも帰化系氏族の間で行なわれたものであることは、当時の民間仏教の動向を知る上に興味深いものがある。

(四)(五)の三例がその文中に「七生父母」の語を共有していることは注目して良いと思う。七世父母に関しては竹田聰洲氏の民俗学の立場からの論考^④があるが、それによると、七世父母の思想は「我が民間信仰と仏教の結合であり、具体的には祖霊を問題にするところの日本の個有信仰が、中国の七世父母思想を抵抗なく受け容れたものである」と説かれている。「七世父母」と「知識」を共有している事例は少数であり、(四)(五)の場合から直ちに結論を導き出し得ないにしても、知識も七世父母と同様の経路で我が国にもたらされ、帰化系氏族の中で消化されて一般に伝播したことを推し得るであらう。知識が一般に普及したについては、知識が共同体觀念の発達した氏族社会にスムーズに融合する様な性質のものであったことが理由としてあげられよう。

この様にして民間に受容され展開していった知識は、河内智識寺^④の造営を以つて一つの頂点に達したと見ることが出来る。

註①日本古典全集「狩谷椽斎全集」第二「日本靈異記攷証」中第卅

一 S 3・1・25

②田中塊堂「古写経綜覽」S 17、によれば、「丙戌、は書体からみて天平十八年でなく天武十四年であり、「評」の使いかたからも裏付けられる」とされている。

③竹田聰洲「七世父母攷」日本仏教受容と祖先信仰 仏教史学一

卷三号 S 25・6

④智識寺は今日その草創に関する詳細を知ることが得ないが、寺号の示す通り知識による造営になると考えて良いと思う。

二 東大寺造営と知識

竹内理三氏は、知識の目的を、(1)造寺(2)写経(3)造像(4)悔過法会(5)建碑義橋、の五つに分類されたが、そのうち一番安易に行なわれるのが写経であり、最も困難な事業が造寺であるが、知識による造寺の有名な例として東大寺の造営を挙げることができる。

もとより東大寺は聖武天皇が国費を傾けて建立したものであるけれども、それに加えて、「民百姓の一枝草、一抔土の知識」が期待され、事実知識による全国からの財物結集が、東大寺造営に大きな力となったであろうことは、続日本紀の記載などからも知ることが出来る。そしてその後国分寺その他の建立、運営が知識システムによつて行なわれるのであるが、現存史料からみるとこれらの知識は、知識物を奉つた故に位階を進めると云うもので、売官的色彩が濃く、三宝に喜捨すると云う純粹な発想による知識のみとは考え難いのである。

聖武天皇の大仏建立の詔^⑥は、「國家の最高主権者としての自信に

満ちたものである」と云われているけれども、それでもなお民間からの知識―それも売官的な―に大きく依存しなければ東大寺の完成が覚束なかった事に問題があると思う。

聖武天皇が東大寺建立を宣言した時、すでに知識による財物の集積が予定されていたのではないかと考えられる。と云うのは、聖武天皇をして「東大寺建立に知識を採用」せしめた動機として「當時民間での造寺造仏が知識によって行なわれ、河内智識寺の建立などの成果が上っていた事実」が聖武天皇の気持を動かしたとみることができるからである。

⑤ 続日本紀によれば、天平十二年の智識寺行幸の際に聖武天皇が盧舍那仏を拜して大仏建立を発願された事になっているが、盧舍那仏への信仰に加えて智識寺の草創の事情も天皇の決断に影響したのではなからうかと考えるのである。

前節でふれたごとき経緯によって民間に知識が普及し、「ついに聖武天皇に、東大寺建立に知識システムを採用せしめた」その直接の原因になった、と云う点で知識寺は大きな役割を果たしたと云える。前節で智識寺の造営を民間における知識活動の一つの頂点として考えたのはそのような意味からである。

智識寺にヒントを得て東大寺造営に知識システムが採用されたことに加えて、民間にあって広汎な教化活動を行ない人望のあった行基の僧正登用を考え併せる時、東大寺の造営は、ある意味で民間仏教運動の一つの前進記録として受けとることが出来る。

国家の手で知識が運営され、それが売官的なものに変質して行った後も、民間にあっては第一節で述べたごとき知識活動が継承されていったのである。次節ではその一つをとりあげてみたい。

註⑤ 竹内理三『上代に於ける知識について』史学雑誌四二編九号S

6・9

⑥ 続日本紀 天平十七年九月条・天平二十年二月条・天平勝宝元年四月条・天平勝宝元年閏五月条

⑦ 続日本紀天平十五年十月十五日詔

⑧ 続日本紀天平勝宝元年十二月二十七日条

三 知識による河内大橋の改修

家原里知識経願文

竊以昔河東化主 諱万福法師也 行事繁多但略陳耳 其橋構之匠啓於曠河般若之願発於後身 此始天平十一年 迄来十二年冬志未究畢 迹偃松嶺 是以改造洪橋花影禪師 四弘之願発於宝橋一乘之行 繼於般若汎導汎誨良父母 干茲吾家原邑男女長幼幸預其化心 託本主 謹敬加写大般若経二帙廿卷 繕飭已畢此第四十三帙并第五十二帙也 仰誓辱捧一蒙之善威 報四恩之重伏願人頼三益之友 家保百年之期 広者少善余祐普及親疎 自他相携共遊覚橋 牽仕知識 牧田忌寸 玉足亮

天平勝宝六年九月廿九日

この大般若経は、四二一巻、四二五巻、四二六巻、四二九巻、四三十巻の五巻が現在知られているが、その内、右に掲げた願文を有するのは四二一巻と四二五巻で、他は知識参加者の署名があるのみである。いずれも願文記載の第四十三帙に属しているが、五十二帙の方は現存を確認されていない。

願文によると万福法師が天平十二年(39)から河内大橋の改修を

第一表
家原里知識経所載人名と出自

巻数	氏名	性別	出自	典拠
四二一	伯太造 豊売	女	河内国安宿郡伯太里	伯太彦神社・伯太姫神社を氏神とする一族
四二五	牧田忌寸 玉足売	女	不詳	
四二六	私若子 刀自 (マヤ)	女	河内国大泉郡家原里	願文記載
四二九	牟文史 広人	男	河内国大泉郡家原里	願文記載
	物部 望磨	男	河内国安宿郡?	河内国安宿郡神別
	下村主 弟虫売	女	河内国大泉郡	願文記載・正倉院文書天平宝字六年八月二七日
四三十	文牟史 玉刀自売	女	河内国大泉郡家原里	願文記載
	馬首宝 主売	女	河内国伎人郷?	万葉集 四四五八 (伎人郷馬國人)

企画したが、果さず天平十二年(二月七日)智識寺行幸があった。註⑨)冬に物化し、のちに花影禪師が師の遺志を継いで改修を完成した。と云うもので、工事に併行して家原里の人々で大般若二十巻の写経が進められ、恐らく橋の完工と共に天平勝宝六年(794)九月二十九日に完成したらしい。

写経の知識に参加した人々は次に示す通りであるが【第一表】これで見ると男女比が一对三と女性の参加者が多いことである。写経の知識に女性が多いと云う傾向と、願文の最後に記されている「自他相携えて共に覚橋に遊ばん」の思想―彼岸極楽に往生しようとう考え方で、この場合現世に河内大橋を架けることと密接につながっている―とを考え併してみる時、次のごとき推論が成立する。

花影禪師の河内大橋改修工事は、写経と同様家原里の人々を中心

とする「知識」によって行なわれたものであり、多くの男性がその工事に参加し、工事を手伝わない女性が写経の知識に加わったと云うのであるが、このことは、第一節でふれた河内仏教の先進性を考えてみても云い得ることである。つまり従来信仰生活に直接結びついたこと―造寺、造仏、写経、法会、寺院運営など―にだけ行なわれた知識が、「彼岸極楽往生」の信仰によって「造橋」などの実生活に関係のある面にも進出してきたのであろう。そして橋と云う公共的なものの造営と云うことで従来同族間とか、村落共同体の間で行なわれてきた知識の範囲が、この頃から拡げられたのではないだろうか、河内大橋の知識では他郷からの参加のあった事を暗示されるのである。⑩)

現世に橋を架ける福によって、彼岸極楽の宝橋に往生しようとする

る願によって造られたこの橋に、河内六大寺等を完成させた技術が当然参与したであろうことを想うならば「き丹塗の大橋」と歌われたこの橋が、「寺院の荘嚴用を兼ねた。」と云われるのも当然であろう。

ではこの様な知識はどの様に組織されたのだろうか、造橋の知識を直接引率したのは花影禪師であるけれども、願文の記述よりみると彼が「宝橋一乗の行」を行ない得たについては、彼の師万福法師の生前の実績がものを云っているように思える。そこで万福の河内大橋改修プランについて多少検討を加えてみたいと思う。

井村哲夫氏の説に従えば天平六年(784)にすでに河内大橋が、それも完成(新設または改修のいずれにせよ)後間もない姿で存在していたことになる。とするならば何故万福はそれから五年後に改修を志したのだろう。木造橋の耐用年数を二十年とすれば万福の発願は時期的に早すぎる観がある。しかも万葉集の天平六年から花影が改修した天平勝宝六年(755)まではほぼ二十年で、耐用年数からみて妥当な改修である以上、万福の発願には何かの理由がなくてはならない。「行事繁多」と云われる万福は恐らく老齢だったのだろう。そこで万福は天平十一年になり、最後の事業として、河内大橋改修を志したのだろう、永久に彼の名を記念する為、その工事は恐らく橋脚に石材を用いた半永久的なものではなかったらうか。と見るならば、その工事は二十年毎の定例改修の時期でなくとも良いことにならう。従って知識物の勧進も長期にわたる可能性があった。事實は一年余で物化し、河内大橋を見おろす上流の松峯に葬ひられたのだろう。人々は万福がその意志を続ければ必ず完成したと信じていた。つまり万福にはそれだけの人望があったのである。そして

それが大般若経願文冒頭に万福の事蹟を記すこととなり、花影の行なった定例改修の知識も万福の業績をしのびながらおこなわれた。

この様に推定することで年数のくい違いを解することが出来る。これは万福が「河東化主」として評価されていることでも裏付けられよう。知識によって事業を起す場合、その引率者は民衆の信頼を得るものでなくてはならなかったのである。

靈異記下巻第十七話の知識による塑像の修理の例(次節参照)では、弥氣山室堂に住んでいた沙弥信行だけでは知識を引率出来なかつたのであり、沙門豊慶の出現によって始めて可能になったのである。また下巻第八話の瑜伽論を写す知識(註⑩参照)が成立したのも無名の行者が弥勒菩薩の助けを得たからであつたことを考えてみると、河内大橋の改修と大般若の写経と云う大規模な知識を組織するには、花影禪師の實力に加えて万福法師の影響が大きかつたことを認めねばならない。

註⑩ 医王寺の旧蔵になる大般若経で、後高野山花園村新子区の所有に帰した。柏原町史によれば、惜しくもシェーン台風の水害で流失したと云う。刊本には写真は無く、大日本古文書、寧楽遺文、古写経綜覧、柏原町史にその願文が記されている。

⑩ 河内大橋の位置は、大和川と石川の合流点をやや下つたところで、右岸大貝郡には北から南へ三宅寺、大里寺、山下寺、家原寺、鳥坂寺と並び、家原寺の西側に智識寺と云う河内六大寺の配置(柏原町史等より復元)になるが、家原寺、智識寺(現安堂地区)の線を西にのびし、対岸の舟橋禪寺(現大和川河床)を結ぶ線上に架けられたと推定出来る。河内六大寺の並んでい

るのは現、東高野街道添いで、大県郡条里の幹線を為すものと考えられるから、舟橋安堂間の河内大橋も条里の東西線上に位置するだろう。従って正確な位置づけは条里の復元に待たねばならない。

⑭ 改修と云つても木造橋の場合、橋脚からやり直すことになるので、新設にひとしい工事になる。

⑮ 四二一巻から四三十巻までの第四十三帙と、五十一巻から五十二巻までの第五十二帙の計二十巻。

⑯ 第一表に示したごとく、伯太造の本貫地は現玉手山丘陵西麓であり、馬首は古市郡の馬毗登益人（統日本紀天平神護元年十二月五日条）か馬史国人の一族とみられる。しかし二人共女性であり、家原里に嫁してからも旧姓を名乗っている場合（中国の風習）もあり得るので、これだけで直ちに他郷からの知識参加と云うことにはならない。しかし馬首が伎人郷出身であるとすれば、統日本紀・万葉集の天平勝宝八年河内行幸の史料から行幸が「智識寺南行宮」↓（河内大橋を経て）↓「伎人郷馬国人家」と云うコースをとったこと（これ以後馬国人は中央に登用される）などのつながりから伎人郷の知識参加が暗示される。知識経願文に「普く親疎に及ばし」と記しているのは、この様な事情によるのではあるまいか。

⑰ 万葉集巻九、一七四二

河内大橋を独り去く娘子を見る歌一首並に短歌

しな照る片足羽河の、さ丹塗の大橋の上ゆ、紅の赤裳すそ引き、山藍もち すれる衣きてただ独り い渡らす児は 若草の 夫かあるらむ かしの実の 独かねらむ問まくの ほしき我妹の

家の知らなく。

⑱ 奥野健治「万葉撰河泉志考」S 16

⑲ 井村哲夫「高橋虫麻呂」―その履歴及び作品の制作年次について―国文学三十四号 S 38・6

右によれば、「四一四二―三の歌は高橋虫麻呂の作で、天平六年三月の住吉浜から竹原井行宮へ巡幸された難波行幸時、もしくはその下検分の時の作である」と述べている。

そしてこの歌で乙女の裳と橋の丹が対比されているが、その女性が美しいものであるほど橋の色もさえたものでなければならぬし、作者の意欲をかき立てるほど新らしい橋であった。と解したい。

⑳ 化主の用語例は、鑑真⇨江淮之間独り化主となす（唐大和上東征伝）道忠⇨東国化主（叡山大師伝）などがあり、化主が道俗双方から崇められたことは、靈異記下巻十九縁からも知れる。降つてはもつと広範囲に用いられるが、奈良朝では使用に限定がある様に思える。従つて万福も道忠などと並ぶ高僧であったことがうかがえる。化主についてはいづれ橋を改めて述べたいと考えている。

四 日本靈異記の知識

景戒によつて、弘仁十三年をあまり降らない時期に編録された「日本国現報善惡靈異記」は、奈良朝から平安朝初期の民間仏教の動向を知る貴重な史料である。そこには知識に関する説話が十二編収録されている。まずその梗概を記してみよう。

上巻第三十五話

河内国若江郡弓削村に練行の沙弥尼が居て、平群山寺において知識を引率し、四恩の為に六道を描いた画仏を作る。後にその画を失うが、知識による放生を行なったのでその画が無事寺にもどる。

中巻第二十六話

禪師広達が、吉野山中で未完の仏像を発見し、有縁の処に請けて人にすすめて物を集め、阿弥陀・弥勒・観音の三尊を完成し越部村岡堂に安置する。^⑧

中巻第三十一話

遠江国磐田郡で、手に舍利を握った女子が生れたので、国司、郡司が中心になって知識により七重塔を建立した。今の磐田寺がこれである。

中巻第三十二話

紀伊国名草郡三上村の人々が、知識によって集めたものを薬王寺の薬分とし、それで酒を作って利殖していた。

中巻第三十九話

一人の僧が耳の欠けた仏像を発見し、知識を引いて仏師を勧請して修復し、鵜田里に堂を作って安置した。

下巻第五話

河内国安宿郡信天原山寺の妙見菩薩に、毎年知識によって燃燈を奉つる。

下巻第八話

近江国坂田郡の人が、一つの山寺で修行している時弥勒菩薩の化生が生じ、近在の人々が銭稻を献じたので、それによって行者は長年の願望であった瑜伽論を写すことが出来た。^⑨

下巻第十三話

美作国の礪山で落盤に合つて穴に落ちた礪夫が、法華経を写すことを発願した為に助かり、その善に感じた国司の援助で知識を引率し写経を完成した。

下巻第十七話

紀伊国那賀郡弥氣里の沙弥信行は、かねがね弥氣山室堂にあった塑像を修理しなかったのだが果さず、元興寺の沙門豊慶が登場して始めて知識を組織し塑像二体の修理を完成出来た。

下巻第二十四話

近江国浅井郡に六巻抄を読む知識があった。

下巻第二十八話

紀伊国名草郡貴志里に一つの道場があったが、それは村の人等が私に作った寺である。^⑩

下巻第三十五話

遠江国榛原郡の物部古麻呂と云う役人が、生前その地位を利用して百姓を苦しめた罪により地獄で苦しんでいることが天聴に達し、皇太子・大臣・百官を挙げて知識に加え、古麻呂の為に法華経一部を写した。

以上十二例を分類(第二節参照)してみると、(1)造寺二(上三十一・下二十八)(2)写経三(下八・下十三・下三十五)(3)造像四(上三十五・中二十六・中三十九・下十三・下十七)(4)悔過法会二(下五・下二十四)と云うことになる。これら靈異記の知識は、第一節で述べた初期の段階から、東大寺造営によって知識が全国に普及し、私度僧の活動によって各村邑に知識が組まれて行った時期のものであり、造寺と云っても小さな里の堂を建てたり、造像にしても

第二表
日本靈異記の知識

分類	巻縁	寺院	引率者	目的
A 山寺中心	上三五 下五八	平群山寺 信天原山寺 一つの山寺	練行の沙弥尼 遊行の行者	面仏を作る・放生 妙見菩薩に毎年献燈 瑜伽論を写す
B 里堂中心	中二六 中三九 下二七 下二八	越部村岡堂 鵜田堂 弥氣山室堂 貴志里道場	禪師広達 遊行の僧 沙門豊慶・沙弥信行	未完の仏像を完成 未完の仏像を完成・造鵜田堂 塑像の修理 貴志里に造堂
C 寺院中心	中三二 中三三 下二四	葉王寺 (九間の大堂を有す寺)		薬分の料を献ず 六巻抄を読む
D 権力中心	中三一 下十三 下三五		遠江国司 美作国司 白壁(光仁)天皇	七重塔作る 法華経を写す 法華経を写す

木像や塑像、面仏などのささやかなものであった。一方寺院運営の面では薬分の料を集めたり、毎年の燈油を献じる知識など後年の「講」的な性格を見せはじめた。そして下三十五の例を除いた他は一般民衆の参加が認められるのである。知識がこの様に民間に普及した証しとして、上巻二十七の石川沙弥の話がある。それは石川沙弥が塔を建てると云って財物を集め、女と二人で飲み食いしていた罪によって悪死する話である、それは知識を利用した詐欺であるともみられるが、詐欺が成立するほど知識が一般化していたものとして受けとることが出来る。その時期では前節で述べた万福のごとき高僧でなくても、知識は成立したのである。ではその知識はどのような

ものに拠ったのだろうか、靈異記の知識は次の通り分類出来る。

A 山寺を中心として組織されたもの。

B 里の堂を中心として組織されたもの。

C 山寺や里の堂以外の寺院を中心として組織されたもの

D 権力を中心として組織されたもの

数値的には、A 3、B 4、C 2、D 3、となるが、A Bを併せた数は全事例の半数を上廻る。【第二表】

これによって、民間における知識が、山寺や里の堂を中心に組織された場合が、いかに多かったかを知ることができる。

民間仏教の中にあつて、山寺や里の堂が、大きな比重を占めるのは

「知識」だけではない、それらを舞台として数々の活動が生れていくことは、靈異記が如実に物語っている。数字の上から云っても靈異記所載寺院は、山寺十五、里の堂十、その他四十四となり、山寺里の堂を併せれば二十五となって総数の三分の一強となる。今我々が奈良朝の寺院名を想い浮かべてみて、その内山寺や里の堂が何パーセント含まれているかを考えるなら、靈異記がいかに山寺や里の堂に、関心を持っていたかを知ることが出来る。

奈良朝における民間仏教が、靈異記の云う自度沙弥(私度僧)を中心に拡がりを見せ、その自度沙弥の人格形成の場として山寺が運営され、そこで修行した自度沙弥が里に下って民衆を教化し、民衆の意識の高かまりによって里の堂が形成される。と云う展開を見せたとするならば、民間における信仰活動の拠点は山寺と里の堂にあったと云える。靈異記の示す知識の傾向からも、その間の事情を読みとることができよう。

註⑩靈異記本文の記載は、知識によるとは記していないが、「人にすすめて物を集め」ることで仏像を完成した形は、知識によったものであることを示している。

⑨これも知識によったと記していないが、現実には弥勒の化生が出現するとは考えられないから、知識による写経の話が転化したものと見て良い。

⑫この場合も、村人の知識による造寺と認められる。

⑬高宮山寺(上四) 比蘇山寺(上五) 法器山寺(上二十六) 平群山寺(上三十五) 生駒山寺(中八) 血淨山寺(中十三・三十七) 金就山寺(中二十一) 金峯山寺(中二十六・下二) 馬庭山寺

(中三十八) 泊瀬上山寺(下三) 信天原山寺(下五) 海部峯山寺(下六) 一つの山寺(下八) 真木原山寺(下九) 石槌山寺(下三十八)

⑭堂(上八) 那天堂(中五) 服部堂(中十四) 越部村岡堂(中二) 十六) 鴨田堂(中三十九) 蓼原堂(下十一) 弥氣山室堂(下十七) 野中堂(下十八) 御上峯社辺堂(下二十四) 大谷堂(下三十四)

五 ま と め

七世父母、六親眷属、功德など一群の仏教用語と共に我が国にもたらされた「知識」が、血縁共同体の中に受容され、最初は帰化系氏族の中で消化され、民間仏教の拡がりと共に漸次四周に波及していった。民間に受容された知識の初期の状態を、我々は河内仏教の遺品の中に見出すことができる。初めは宝林などの僧を中心に、氏寺を舞台として、古代インテリ階層の中で組織された知識も、次第に範圍を拡げ、河内智識寺が造営される段階になると、恐らく豪族クラスの人が資金と資財を、その傘下の民衆が労力を奉仕する形で進められたのだろう。更に河内大橋の造営と云う、地域社会の公共事業までもが知識によって為されたことなど、河内における知識の発展の中に、奈良朝民間仏教の歩みを見ることが出来る。ここに至るまでには、宝林、道昭、万福、花影その他の名僧の教化活動によったのは当然ながら、彼等をして円滑な活動を行なわしめた社会的条件のあったことも見逃せない。

民間における信仰活動のフィールドとして、山寺や里の堂が各地に営なまれる様になったのも、知識による造寺造仏の方法が各地に

波及したからであろうことを考えるならば、民間仏教運動隆盛に果たした「知識」の役割は大きなものがあつたと云い得るだろう。

本稿においては「檀越」についてふれることを得なかつたが、資金資財を提供するのも、労力奉仕を行なうのも、いずれも知識に参加することには変りないので、檀越階級も一般民衆も一体となつて民間仏教運動の推進に力を添えたのであろう。知識寺の造営も、河内大橋の建設もその様にして行なわれ、靈異記の伝える知識も同様であつただろう。

奈良朝における民間仏教の展開を「知識」の面から解明し、併せて知識そのものを分析する心算で稿を起したが、所期の目的を達したとは云い難い。しかし本稿が奈良朝民間仏教運動解明の為に「一技草」の役割を果たすとすれば幸である。

終りに当って、色々御教導をいただいた本学の、末永雅雄、横田健一、有坂隆道、園田香融の諸先生、その他史学科の諸先生方に感謝の意を表します。

附記

○本稿は、昭和三十八年七月六日、京都女子大における研究発表会で発表したものを骨子とした。

○河内大橋について、特にその所在に関しては、従来史学よりも国文学の分野で論じられてきた。そのために関係論文も少くなく、いきおい註釈が冗長になり、読み苦しいものとなつた、御寛恕を乞う。

○本稿校正の段階になつて、五来重氏の『紀州花園村大般若経の書写と流伝』大谷史学第五号S1・3と云う論文のあることを知つた。氏はその中で、天平—天平勝宝年間に河内の各地で分担書写された「大般若知識経」が、河内↓泉↓紀伊と流伝し、その間に出来た欠本を、その時々民衆の力で補綴されて行つた過程を、医王寺旧藏経によつて考証されている。就中四十三帙に属する家原里知識経に関する論考について、特に、知識参加者の出自、河東化主万福の周辺、河内大橋と六六寺等にかかわる御高見は、拙稿第三節と重複する点が少なくない。私の浅学非才の故に、氏の御高説を充分消化吸収出来なかつたことは止むを得ないとしてもその為に先学の金字塔を漬すことになつた結果を深く陳謝したいと思う。

しかしながら、拙稿においては、「河内大橋改修の知識には、他郷からの参加者があつたことが暗示され、もしそうだとすれば、僧俗双方から崇拜され、化主と尊称された万福の影響によつて、始めて知識を引卒出来た」と云うことを述べたのであり、五来氏の論文内容と、同一素材を扱う上での重複はあるにしても同一主題による論文ではないので、現状のままでも多少の価値は有ると考え、改定は加えないことにした。将来、氏の論考をとり入れて、更に研究を進めたいと考えている。

以上のごとき事情を明らかにし、若輩の五来氏に対する非礼を謝し、大方の御了解を得たいと思う。